

古典衣裳の活用と保存

昭和女子大学名誉教授 村 井 不二子

本学の重要な衣服資料に、一般に古典衣裳と称される装束類がある。昭和四十五年前後、第三代学長の河鱈実英先生の時に収集された衣裳や道具などである。河鱈先生はもと子爵、大正天皇の侍従を勤められた有職故実の大家である。昭和女子大学で戦後間もなくから有職故実、被服史を講ぜられ、私も教え子のひとりである。先生は氣品高く温厚篤実、その出自と深い学識に裏打ちされた講義の数々は、今でも眼前に在るが如く思い浮かぶ。

以下収蔵された資料の主なもの述べると、束帯・唐衣裳装束を始めとする公家服飾、直垂、大紋、袴、烏帽子などの武家服飾や道具類・戦前の裁判官法服などがある。これらは専門店から購入したもの、河鱈先生御自身及び公家御親戚その他から寄贈されたものなどから成り、その中には昭憲皇太后の御洋服の一部、紀州家奥の衣裳や御殿女中方の風俗人形のような貴重なものが含まれている。時代としておおよそのものは、幕末から明治・大正にかけてのものと推定される。

掛軸も多く、大内裏を始め、宮殿・庭園・建築物の図、絵画資料から抜き出した各時代・各階級の人々の服飾図などがある。伝来のものを除くこれらの多くは河鱈先生のご指導のもとに日本画家に描かせたもので、彩色画・白描画など多岐にわたる好資料である。

このように河鱈先生の御努力と御好意によってこれらの資料は集められ、専門家から見ても、またと得難い優品が揃えられたのである。

学校の資料というものは、学生や生徒の教育のための参考資料であるべき一面を持っており、前学長人見楠郎

先生も、この衣裳類は、二、三年に一度は展示して学生に見せるようにとおっしゃって、一揃いになるべき衣裳の不足の分を新たに購入して下さった。私は日本服飾史の講義の時には、一括展示して学生たちに見せている。資料そのものは新しいとはいえ、平安から中世・近世・近代の服飾資料の形態を実物として見ることは、学生たちに日本服飾の美と技術と精神を理解させるには非常に効果的である。

しかし一方では展示によって有機物である布や木や紙を損ずることは明らかであろう。保存と活用、この両者をどこでより有効な場にまとめるか、これが博物館収蔵資料に与えられたもつとも困難な宿題であろうか。

これは平成十三年十二月十六日に開催された昭和女子大学文化史学会
第八回大会における講演要旨です。 — 編集委員会



